



とうけい よ きんぎょうどうめつじん
当来の世に経道滅尽せんに
 われ慈悲をもって哀愍して、
 特にこの経を留めて止住す
 ること百歳せん。それ衆生
 ありてこの経に値ふもの
 は、意の所願に随いひてみ
 な得度すべし。

（『仏説無量寿経（流通文・弥勒付属）』）

将来、すべての教えが無くなったとしても、お釈迦さまは、慈悲をもって、この経（仏説無量寿経）つまり阿弥陀さまのご本願だけは、永久に残すとお誓いされたお言葉です。

発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺
 〒112-0075
 東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
 TEL 〇三―五二四二―二〇二五
 FAX 〇三―五二四二―二〇二六
 HP shousanji.com



二〇二二年度 稱讚寺門信徒会費
 年会費 六千円
 振込先 城北信用金庫 一ツ家支店
 名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会
 代表 北村 信也
 □座 普通 6176051

三年ぶりに、鹿兒島の稱讚寺の永代経法要に向いました。今年のお盆にも帰省しましたが、お盆ではお会いできなかったお同行ともお会いすることができました。

十月二十七日（土）・二十八日（日）日中のみ二日間勤まりました。参拝はそれぞれ二十名程でした。

ご門徒さんのお一人が、受付でお布施を渡され、お扱いの品をお渡しする際、そのまま本堂に向かわれようとされました。呼び止めたら、「はら〜」とおっしゃいました。いつものことでありながらうっかり忘れていたことに気づいたときや、思いがけないことに遇ったとき、鹿兒島弁で「はら〜」と口に出ます。

阿弥陀さまのお心（ご信心）も私は忘れていても、阿弥陀さまは、私のところにいつも居てくださっておられるからこそ、安心できるのです。

正定聚について

仏教では、「さとり」（サンスクリット語 bodhi）は「悟り」「覚り」「覚」「悟」「覚悟」「証」「証得」「証悟」「菩提」「阿耨多羅三藐三菩提」「無上正等覚」「涅槃」「解脱」等と表現され、迷いの世界を超え、真理を体得する意味します。仏陀 (buddha) とは、目覚めた人を意味します。

その仏陀に成るため、三乗（声聞・縁覚・菩薩）があります。

○声聞―仏の声に導かれて自らの悟りのみを求める。

○縁覚―一人で悟りを開き、誰にも教えない。

○菩薩―自らのためだけでなく、一切の人々が救われるために修行する。

この三つの道の中で、菩薩の悟りに五十二段階あります。

- 一段目〜一〇段目 十信（じっしん）
 - 一段目〜二〇段目 十住
 - 二段目〜三〇段目 十行
 - 三段目〜四〇段目 十回向
 - 四一段目〜五〇段目 十地
 - 五一段目 等覚
 - 五二段目 仏覚（妙覚・無上覚）で、一段だけで雲泥の差があると言われます。
- そして、四〇段目以上（初地以上）を、必ず悟りを開いて、仏に成ることが正しく

定まっている聚（ともがら）であり、「一生補処の菩薩」とか「不退位」とも言われます。

この「正定聚」に至るには、この身が滅んだ後、浄土に至ってからであり、そこで修行して仏に成ると解されておりました。それを親鸞聖人は、「信心を獲た人は、「現生正定聚」（阿弥陀さまのご本願力（他力）のひとりばたらきによって、この世で煩惱を具足したまま、必ず仏に成る身と定まる）」とおっしゃったのであります。

弥勒菩薩は、お釈迦さまの次に仏さまに成られる方でありますので、「信心を獲た人を「弥勒と同じ」とも言われました。またお他宗では、「弥勒仏」とも言われるので、「信心を獲た人の心は「如来と等しい」とまでおっしゃっておられます。

また、「正定聚に住することを「即得往生」・「必得往生」とも表現されていもおられます。が、「信心を獲たら「現生」において、浄土に往生することと理解するのはなく、阿弥陀さまがこの私に「南無阿弥陀仏」（必ずあなたを仏にします）」と呼び続けておられる「証」と捉えていただけたらと思えます。

ご信心をいただいた私は、もう仏と同じと思うのではなく、お念仏申す方の姿に、自然と手を合わせる営みを送るところに、「現生正定聚」の意義があるのではないのでしょうか。

築地本願寺報恩講のお知らせ

期間 二月一日（金）お逮夜

二月六日（水）ご満座

基本日程

- 六・三〇 晨朝勤行 布教
- 九・〇〇 布教
- 一〇・〇〇 日中法要 布教
- 一三・二〇 堂内布教
- 一四・〇〇 逮夜法要 布教 帰敬式
- 一六・〇〇 絵解き布教
- 一七・〇〇 初夜勤行 布教

【一日逮夜布教〜三日逮夜布教】

布教使 藤本文隆師（奈良県）

【四日晨朝布教〜六日日中布教】

布教使 武田一真師（広島県）

【通夜布教 一五日〜一六日】

- 二一・〇〇 武田一真師
- 二一・四〇 柳川眞諦師
- 二二・三〇 田中頼子師
- 二三・一〇 村上弘樹師
- 一・〇〇 渡邊元綱師
- 一・四〇 松本智量師
- 二・二〇 澤田唯師
- 三・一〇 千田匡真師
- 三・五〇 成田真二郎師

※申し訳ありませんが、この度も稱讃寺として団体参拝は組みませんので、各々、ご参拝ください。またYouTube築地本願寺でも生配信されます。



YouTube築地本願寺QRコード

現世利益和讃について

十二首

がんにきふしぎ しんじん

願力不思議の信心は

だいぼだいしん

大菩提心なりければ

てんち

あくきじん

天地にみてる悪鬼神

みなことごとくおそるなり

『生命環流 浄土和讃を読む下』大峯顕氏著

如来より賜る菩提心

この和讃で、初めて「信心」という言葉が出て来ます。念仏とは南無阿弥陀仏を称えることですが、信心とは南無阿弥陀仏を信じるということとです。そして信心と称名とは一つのことと不離不即です。『歎異抄』第十一条に、南無阿弥陀仏を称えればお浄土に往くのか、それとも誓願を信じればお浄土に往くのか、という問題が出ています。当時、ちよつと勉強した人が、素朴にお念仏を喜んでいる人に向かつて「お前は弥陀の誓願を信じて念仏しているのか、それとも名号を信じて念仏しているのか」と聞いて惑わせたというのです。唯円房は、誓願の不思議によって南無阿弥陀仏の名号となられて、こ

の名号を称える者を助けると約束されているのが阿弥陀さまのお心だから、お念仏を称えることと阿弥陀さまを信じることは一つのことであつて、決して別々のことではない、と丁寧に教えています。ですからここでも、称名念仏のことを信心と言ひ換えておられますが、同じことを言つておられるのです。

阿弥陀さまの願力は不思議としか言いようがありません。なぜなら、地獄行きのをそのままで助けようとおつしやるからです。今まで地獄行きだった人間が、心を改めてお浄土往きの人間になつたら助けようというのなら、少しも不思議ではないでしょう。この理屈なら、人間の頭でもわかります。一度も仏法を心にかけてこともなく、悪いことばかりやってきた人間は仏になどなれつけないというのが、われわれの常識です。お寺に参つて熱心に南無阿弥陀仏を称えている人はお浄土に往くことだろうが、そうでない人は無理だろうと思つています。しかし、阿弥陀さまの本願は、煩惱に焼かれながらしか生きられない私たちが、必ず助けるという阿弥陀さまの言葉を信じるだけで、往生が定まるという本願です。常識を超えた願力の不思議を聞かせていただくことが大事です。

その願力の不思議によつて私たちがいただく信心が、大菩提心だと言われています。菩提心とは、仏になろうという心のことです。禅宗や真言宗などの聖道門では、まず仏になろうという心を起さなければなりません。皆さんは今日の報恩講法座に、仏になろうと思つてお参りされましたか。たぶん違うだろうと思ひます根報恩講にはいつも参ることにしているから来たという人はいても、仏になろうとして来たとい

う人はいないでしょう。しかし自力聖道門は、この菩提心を自分で起さなくてはならない教えです。この世を快樂のために生きるのではなく、仏になるために人生を生きるという心を起すことが大前提になるのです。

ところが、親鸞聖人は、そういう自力聖道の菩提心は凡夫にはとうてい起せないと、起したとしても未通らないものだと教えてくださつたのです。未通らないのは、首尾一貫しないということです。しかし、そもそも菩提心がなかつたらお浄土へは往けません。そうすると、菩提心を発せないわれわれ凡夫にお浄土へ往く道はないということになります。それでは一体、どうしたらよいのでしょうか。実は、その菩提心に二種類あるということを見つけたのが、親鸞聖人です。菩提心には自力の菩提心と浄土の菩提心の二つがあり、浄土の菩提心とは実は信心のことだと言われるのです。信心とは、阿弥陀さまの心をいただくことです。浄土の菩提心が菩提心だと言われるのは私たちが自力で作つた菩提心ではなく、阿弥陀さまがくださる信心の中にこもつてある菩提心だからです。つまり、如来さまにまかせる信心の中に、菩提心が同時に与えられるのです。この菩提心は、阿弥陀さまがくださった金剛不壊の菩提心です。だから、そういう信心の行者を見たら、天地に充ち満ちている悪い神がことごとく尊敬することになります。信心の行者にはもはや怖ろしいものは何もありません。いかなる悪も障げにならないのです。

願力不思議の信心というのは、如来の願力を源泉にして生まれて来る心です。たとえば『高僧和讃』には次のような一首があります。

信は願より生ずれば

念仏成仏自然なり

自然はすなはち報土なり

証大涅槃うたがはず

(『註釈版聖典』五九二頁)

他力の信心は私の心から発源するのではなく阿弥陀さまの心から発源するのです。阿弥陀さまの心が私の心に移る、もしくは映ると言ってもかまいません。仏になりたいとは思わない私の心に、如来にせずにはおかないという阿弥陀さまの心が移ってくると、そこに信心が生まれるのです。信心は、私の心において起こることでありますが、私の心から起こることではありません。私において起こることと、私から起こることとは違うのです。この違いに気づかなければなりません。もちろん、私の信心は私以外の人に起こるのではなく、どこまでも私の心に起こることであります。けれども、それが起こって来る源はどこかと言うと、それは私の心ではなく阿弥陀さまの本願なのです。仏にせずにはおかない、信ぜしめずにはおかないという如来の心が、そのまま私の心に移ってくるそうすると私の中に、阿弥陀さまにまかせるという心が自然に起こるのです。だから、お念仏することも仏さまになることもみな自然なことです。私たちが仏になることに何の疑いもありません。仏に成るといふことは阿弥陀さまのおっしゃることですから、微塵も疑う余地がないのです。

別の言い方をすれば、阿弥陀さまは私たちが往生成仏することに安心していらっしやるのです。安心されたから、阿弥陀さまに成られたの

です。法蔵菩薩が、私たち衆生をどうしたら救えるかを心配して、五劫の思惟を重ね兆載永劫の修行をされ、そして衆生を救える南無阿弥陀仏と成られたのは、これで心配ないと安心されたからです。南無阿弥陀仏は、誰でも称えることができず。欲が深いから南無阿弥陀仏が称えられなという人はおられないはずです。他人の悪口を言う時の口と、南無阿弥陀仏を称える口とは、不思議なことに同じ口です。阿弥陀さまは、お前の口は汚れているから出たくないなどとはおっしゃらず、さつきまで欲や愚痴の話をしていたその同じ口から平気で出てくださるのです。

だから、南無阿弥陀仏という、阿弥陀さまが語られる声を聞けばよいのです。そうしたら私の中から、自然に南無阿弥陀仏の称名が出て来ます。それが弥陀の本願から生まれた信心です。この信心は仏心であって、人間の心ではありません。人間が起こした心でどうしてお浄土に往けるでしょうか。阿弥陀さまが私に起こしてくださった信心だから、必ずお浄土に往くことができるのです。

考えてみたら人間というものは不思議な存在で、他人の悪口を言うこともあれば、仏さまが乗り移られることもあるのです。乗り移ると言くと、新興宗教の教祖さまだけのことのように聞えるかも知れませんが、そうではありません。乗り移られるということがあるのです。阿弥陀さまの招喚の言葉を聞いていたら、いつの間にか私の口から南無阿弥陀仏が出てくださるのです。これが、阿弥陀さまに乗り移られた証拠です。

衆生を救わずにはおられないのが阿弥陀さま

です。如来さまは、どれほど救い難い人間であつてもあきらめられることなく、必ずお念仏させて仏にするとおっしゃるのです。途方もなく気が長いのです。私たちは気短かで自分のことをすぐにあきらめてしまします。たとえばこんな聴聞してもわからないからといってあきらめたりします。あるいは「死にたくない」と思っているのに、最後は「どうでもいい」と言つて死んでしまつたりします。ところが阿弥陀さまは決してあきらめることがなかったのです。十方の衆生を仏にするために、五劫の思惟と兆載永劫の修行を貫徹されて、南無阿弥陀仏になつて喚びかけたら、衆生は南無阿弥陀仏の名号は、十方の衆生が一人残らず仏になれると阿弥陀さまが安心された姿です。その名号の不思議な力によつて私たちも安心できるのです。

心配そうな顔をしたお医者さんでは、治る病気もなかなか治らないでしょう。患者は「必ず治るからまかせなさい」と言つて欲しいのです。そう言つてくれるのが名医ではないかと思いません。阿弥陀さまは名医の名医です。われわれが信じてお浄土に生まれるということを、阿弥陀さまは少しも疑つておられません。衆生には疑っている人がいるかも知れませんが、阿弥陀さまの方は少しも疑っていないのです。どんな人間でも、お念仏してお浄土に生まれることをご存知なのです。十方衆生はみな念仏して仏になれるのだ。そうならなかつたら阿弥陀仏にはならないと誓つて、今すでに阿弥陀仏に成つておられるのがその証拠です。衆生の成仏に安心されている阿弥陀さまのお姿を見れば、こちらにも自然に安心が湧いてきます。阿弥陀さまの心が私の心に移って来るからです。

親鸞聖人の魅力

―時代即応の教学について―

波佐間正己氏

魅力八 神祇の批判があること

世界には、色々な宗教があります。昨今は、オム真理教のサリン事件や、中東の止むことのない相互の攻撃などを聞き、「宗教が争いの原因ではないか」と言う不信感さえ生まれています。「神」は何のためにあるか、問われる時代となりました。

日本の歴史では、神仏習合と呼ばれ、神仏は垂迹の關係にあると、神社と寺院が同居する事態が続きました。そして両者は、ともに鎮護国家の役割を担っていました。明治維新の政策で「神仏分離」したのですが、市民の日常に、仏教と神道の両方の儀礼が混ざって残っていることや、奈良の春日大社に東大寺の僧が参る儀式が今も残っている事態は、長い過去の伝統でしょう。

この日本の状態は、心ある方々からは、節操が無いと批判されていますが、一方では、宗教の戦争がない、平和な姿だと、評価する人もいます。私どもは、どう考えればよいでしょうか？親鸞聖人は、神祇について、信心の菩提心の立場から、批判されています。

〔実例一〕『教行信証』「化身土巻」（『註釈版聖典』四二九頁）に、

涅槃經にのたまはく、「仏に帰依せば、つひにまた、その余のもろもろの天神に帰依せざれ」と。

般舟三昧經にのたまはく、「優婆夷、この三昧を聞きて学ばんと欲せんものは・・・みづから仏に帰命し、法に帰命し、比丘僧に帰命せよ。

余道に事ふることを得ざれ。天を拝することを得ざれ。鬼神を祠ることを得ざれ、吉良日を視

ることを得ざれ」となり。

と、優婆夷すなはち在家の信者にも厳しい禁止の文を紹介されています。

その理由を示される箇所として、同「化身土巻」四五三頁、

『首楞嚴經』にのたまはく、・・・もろもろの衆生をして愛見の坑に落さしめん。菩提の路に失し、眩惑無識にして、おそらくは心を失せしめん。所過のところに、その家、耗散して、愛見の魔となりて、如来の種を失せん。

とある部分が当たると思います。鬼神として祠るレベルが低いと言う見解です。その「愛見の坑・魔」、「菩提の路」という言葉は、「小悲・大悲・大悲」三五九頁（証卷・論註）の言葉と合わせて考えると、仏教の考えがよく理解できます。

ところが、聖人の『ご消息』七八六頁には（部分）

よろづの神祇・眞道を、あなづりすてたてまつると申すこと、この事ゆめゆめなきことなり。

・・・（中略）・・・天地におはします、よろづの神は、かげのかたち添へるがごとくして、まもらせたまふことにて候へば、念仏を信じたる身にて、天地の神をすてまうさんとおもふこと、ゆめゆめなきことなり。云々・・・

と、右の「化身土巻」の經文と反する言葉を述べておられます。勿論、經典の言うインドの神と、聖人の手紙の神は異なりましようが、「神」というものが、人間の「恐れ」の対象であることは、同じような働きを示す概念です。

經典の「神に帰依するな」という事と、お手紙の「神をあなづるな、捨てるな」と言う、矛盾するよな二つの聖人のご教示は、どう理解すれば良いのでしょうか。これを解くカギが、親鸞聖人の『現世利益和讃』にあります。

〔実例二〕『註釈版聖典』五七五頁に、
天神・地祇はことごとく 善鬼神となづけたり

これらの善神みなともに
念仏のひとをまもるなり

願力不思議の信心は 大菩提心なりければ

天地にみてる悪鬼神

みなことごとくおそるなり

と言う二首です。善い鬼神と、悪鬼神と区別されています。

従って「善い神は捨てるな」、「悪い神は、拝むな」、と言う二面があるわけです。善い神と、悪い神を区別する基準は、右の二首によると、「念仏の人を護るか、どうか？」と言う視点と、「大菩提心（目覚めを求め、人々をも目覚めさせたいと思うころ）に沿っているか、その菩提心を怖れているか？」と言う自利利他の視点で区別する基準を持つことが大事になります。

つまり、私どもが、その神を「認めるか、拝まいか」と判断が大事で、どう対処するかは、まず調査してから、判断せよと言われていることになりました。

とかく一般に、「周りが拝むから、自分も拝む」と言う人々が多いことが問題です。また「昔から拝んでいる」と伝統に従順で、無批判が問題です。

昔の歌に「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなきに涙こぼるる」という和歌があります。が、雰囲気・感情に流される、日本人の特性を示す内容です。森に囲まれた神社には、たしかに神々しい思いを起こす働きがあります。しかし、そういう外面的なことに惑う凡夫の心を考えたいと思いません。

親鸞聖人は、そんな当時の時代の姿勢を批判されたわけです。

※果たして、お念仏申すようになると、善鬼神か悪鬼神かの判断能力が身につくようになるという事なのだろうか？

親鸞聖人御誕生八五〇年

立教開宗八〇〇年

慶讃法要企画

親鸞聖人を知ろう

NHK大河ドラマ『鎌倉殿の十三人』も最終章に入りました。「和田合戦」で、執権北条義時が完全に関東での権力を掌握した頃、鎌倉では一二一三年から一二一四年の二年間で十回も大地震が起こりました。

一二二一年五月、承久の乱が勃発して、七月には後鳥羽上皇は鎌倉幕府に敗れて、隠岐の島の流されます。一二二四年六月、主人公の北条義時が死去（一二二五年に北条政子が死去）し、このドラマは最終回を迎えるのでしょうか。

一二二四年、時同じくして、親鸞聖人は、稲田で『教行信証』の草稿を完成されました。五二歳の頃と伝えられております。一二二七年には嘉禄の法難が起こっております。

『教行信証』に見る越後流罪に関する常識

『教行信証』の越後流罪をめぐって、従来、次のような常識がありました。それは後鳥羽上皇をはじめとする朝廷と延暦寺や興福寺の仏教教団勢力が手を組んで、法然聖人の専修念仏勢力を弾圧したという常識です。それは専修念仏が国家体制を壊そうとしていたからだ、国家に反逆を企てていたからだ、ということでした。この常識によって、親鸞聖人は国家権力と闘う人だったとされてきました。その最大の、そして唯一の根拠が『教行信証』化身土巻の次の記事でした。引用文には、便宜上、少しずつ分け

てA～Eの記号をつけました。

(A) 洛都の儒林、行に迷ふて邪正の道路をわきまふることなし。(B) ここを以て興福寺の学徒、太政大臣【後鳥羽の院と号す】「諱尊成」、今上【土御門の院と号す】「諱為仁」聖曆、承元丁卯の歳、仲春上旬の候に奏達す。(C) 主上臣下、法に背き義に違し、忿をなし怨を結ぶ。(D) これに因りて、真宗興隆の太祖源空法師ならびに門徒数輩、罪科を考へず、みだりがわしく死罪に坐す。あるひは僧儀を改めて姓名を賜ふて遠流に処す。(E) 予はその一なり。(もとは漢文です。)

京都大学区名誉教授で鎌倉時代研究の第一人者である上横手雅敬氏は、この文章は次のような意味であると主張されます（「建永の法難について」『鎌倉時代の権力と制度』思文閣出版、二〇〇八年）。歴史学者の間では、浄土真宗でいうところの「承元の法難」を「建永の法難」と称することが多いです。（以下の現代語訳は本稿の筆者（今井）が行いました。）

(A) 京都の儒学者たちは進むべき方向に迷い、正しいことと悪いことの判断がつかないでいました。(B) このような状況の中で、興福寺の学僧たちは後鳥羽上皇（お名前は尊成）とその時の天皇である土御門天皇（お名前は為仁）に対し、承元元年（一二〇七）二月上旬、専修念仏者たちを断罪してくれるように申しあげました。(C) 後鳥羽上皇とその下にいる貴族たちは、法で定められたような処断の手続きを取らず、正しい政治に背いた行動を取りまし

た。彼らは何かを恨みがなく思い、怒っていません。その感情のままに処断したのです。(D) このようなことで浄土真宗を興した大功労者の法然聖人とその門下数人を、正しく裁判をせず、上皇は勝手に死刑にしてしまいました。また何人かは僧侶の身分を取り上げて還俗させ、族人としての姓名をつけて流罪にしてみました。(E) 私親鸞はその一人です。

親鸞聖人は何を問題にしているのか

1 「洛都の儒林」がなぜ『教行信証』に出てくるのか

いったい親鸞聖人はこの化身土巻の文章で、何を問題にしているのでしょうか。後鳥羽上皇を非難していることは間違いないでしょう。でも朝廷で院政を主導している実力者後鳥羽上皇は国家権力の権化だ、倒せ、などと声高に叫んでいるわけではありません。最初に(A)の「洛都の儒林」を非難していることに注目しなければなりません。「洛都の儒林」とは、朝廷に仕えている京都の儒学者という意味です。さらに詳しく説明しますと朝廷の裁判に関わる仕事をしている儒学者のことです。

裁判の仕組み

朝廷で、犯罪の被疑者を捕えた場合、審議してどのような刑罰が適当か決定します。今日風にいえば裁判を行います。刑罰は五種類あります。一口に答（ち）・杖（じょう）・徒（ず）流（る）・死（し）といえます。「答」は背中を棒で五十回叩く刑罰です。いわゆる答（むち）で叩くものではありません。「杖」は同じく棒で背中を百回叩く刑罰です。叩かれた人は血

だらけで半死半生になったそうです。「徒」は懲役刑、「流」は流刑、「死」は死刑です。

被疑者についての裁判の過程で、真っ先に仕事をしなければならぬのが儒学者たちです。その係りの儒学者たちが集まり、担当の公卿（くぎょう）の諮問に応じて話し合います。この被疑者は「杖」が適当、こちらは「流」が適当と答申をするのです。その上で公卿たちの会議で決定されるのです。

公卿というのは、多数いる貴族の中の最上層の人びとです。職でいえば、太政大臣・左大臣・右大臣・大納言・中納言・参議の人びとです。大納言以下は複数いますので、いつもだいたい十数人です。現代の内閣の大臣とほぼ同じ人数です。天皇または上皇が強力な場合は、むしろその意志が尊重されます。

「流罪」と答申する場合、流刑地まで決定して答申したわけではありません。どこに流すかは公卿の会議で決定されます。そして興味深いのは、答申から決定までの間にはかなりの日数があることです。つまり、今日風に言えば、かなりの情実が入る余地があるということですね。そしてそれは非難されませんでした。

親鸞聖人は何を問題にしているのか

1 「洛徒の儒林」は役割を果たしていない
ところが儒学者たちは行うべき役割を果たしていなかった、と親鸞聖人は問題にしているのです。法然聖人・親鸞聖人以下が朝廷の名のもとに処罰されたことについて、儒学者たちは答申をしていなかったのです。それは大変な職務怠慢だろう、と親鸞聖人は非難しています。それが（A）の「行に迷ふて邪正の道路をわきま

ふることなし」という文章の意味です。

親鸞聖人は何を問題にしているのか

1 後鳥羽上皇の手続き無視を非難
むろん、儒学者たちが勝手に答申を行わないなどということはあり得ません。それは後鳥羽上皇がその答申をさせなかった、つまりは諮問をしなかったことがそもその問題だったので、後鳥羽上皇の怒りと激しくて、裁判の正しい手続きを無視し、法然聖人・親鸞聖人以下を上皇が勝手に有罪と決めつけてしまったのです。それが（C）の「主上臣下、法に背き

義に違し、忿をなし怨みを結ぶ」という文章の意味です。後鳥羽上皇が何を怒り怒ったかといえば、それは自分が紀伊国（和歌山県）の熊野神社に参詣している間に、愛人たちが専修念仏の会に参加し、上皇に無断で出家してしまっただけのことです。上皇は愛人たちに捨てられたのです。彼はまだ情熱あふれる二八歳の若者でした。彼はまだ情熱あふれる二八歳の若者でした。後鳥羽上皇が「法に背いたのは、自らの愛人問題が原因でした。その上皇の意志を止められなかった「臣下」の貴族たちをも、親鸞は問題にしているのです。

「愛人問題で越後に流された」のは嫌だ？

私は、「親鸞聖人が愛人問題などという次元の低い理由で越後流罪になったなんて嫌だなあ」という感想を何度か聞いたことがあります。「国家を弾圧」の方が気分いい、親鸞聖人はそれほど重要な人物だったんだ、と思いたいということでしょう。どのように思おうと自由でありますけれども、『教行信証』は「専修念

仏者への国家の弾圧、後鳥羽を倒せ」という視点で書かれているのではなく、「裁判手続きの誤り」という視点で書かれているのです。

専制的権力をもった上皇たち

平安時代から鎌倉時代にかけて、院政を行っていた上皇たちは非常に強い政治的権力を握っていました。それは白河上皇に始まり、鳥羽上皇・後白河上皇・後鳥羽上皇と続く四代の上皇たちです。彼らは強力な指導力を発揮して朝廷の中では貴族勢力を圧倒し、武家勢力に対しては貴族を守りました。また仏教勢力に対しては信仰面の依りどころを求めつつ、統制下に置く努力を続けました。上皇たちは、個人的な、あるいは公けのさまざまな理由で仏教勢力に干渉しました。専修念仏者だけが被害に遭ったわけではありません。私たちは周囲の状況も見るべきです。

『教行信証』が書かれた場所と時期

『教行信証』は関東で書かれました。それは親鸞聖人五二歳の時です。後鳥羽上皇が承久の乱で幕府軍に敗れて隠岐の島に流されたのはその三年前です。帰洛をもとめる朝廷の願いを、幕府は絶対に認めませんでした。『教行信証』は幕府のお膝元の関東で執筆されています。親鸞聖人を保護してくれている宇都宮頼綱は幕府の有力者です。彼は変わらず専修念仏者たちの味方です。法然聖人没後の最大の法難である嘉禄の法難はこれから三年度ですが、その時頼綱は数百人の騎馬軍団を率いて法然の遺骸を守りました。（『拾遺古徳伝絵』）

（次号に続く）

稱讚寺 行事予定

二〇二二年 一二月の行事予定



六日(日) のんのん法話会 午後二時

二一日(金) 速夜〜一六日(水) 日中

築地本願寺親鸞聖人報恩講

今回も団体参拝を組み合わせ
各々でのご参拝いただきます
よう宜しくお願いたします

一六日(水) のんのん法話会 午後二時

二六日(土) のんのん法話会 午後二時

しあ
仕合わせは

くら
比るあでなく

さき
歩いていくあ

二〇二二年「心のともしび」十一月カレンダーより

「ウクライナ緊急支援募金」募集について

本願寺派では、ロシアの軍事侵攻により避難生活を余儀なくされているウクライナの人々を支援することを目的に、緊急に「たすけあい運動募金」において標記募金の募集を開始いたしました。つきましては、募金にご協力いただきますよう、下記の通りお願い申し上げます。 合掌
記

1. 募金の名称 浄土真宗本願寺派 たすけあい運動募金
「ウクライナ緊急支援募金」

2. 受付口座番号

〈郵便振替〉 01000-4-69957
加入者名 たすけあい募金

〈銀行振込〉 銀行 ゆうちょ銀行
店名 一〇九(イチゼロキュウ)店
番号 当座 0069957
名義 たすけあい募金

※通信欄に「ウクライナ緊急支援」とご記入ください。

編集後記(愚案)

世界平和統一家庭連合旧(統一教会)の問題で、「宗教二世」が話題になり、今年の流行語大賞にノミネートされました。(私的には、「キウウ」が大賞だろうと思います)。「宗教二世」へのアンケート結果が次のように報告されました。「東洋経済」によると回答のあった八割が「苦痛」を感じたと回答。理由は「信仰を強制される」が一番多く、「布教や選挙の手伝い」「周囲の無理解」「恋愛結婚の制限」「人間関係(いじめ含む)」等の順でした。虐待と感じることも多くあり、「精神的・霊的な虐待」「体罰」「育児放棄」の回答が多くあった。また、「社会調査支援機構キラボ」アンケートでは「旧統一教会」だけではなく、他の新興宗教の人からも対象にし、「性に関する規範意識やタブー意識」「マイノリティに対するネガティブな価値観」「恋愛・交友関係の制限」「献金要求」等の回答があり、子ども救済の観点からの社会的対応が必要であるが、この問題がクローズアップされることで、宗教全体に対して疑問視するような声が拡がることに懸念されるとしています。ここでは触れてないが、子どもが老いた親への宗教的虐待もあるだろうと思います。私たちの宗派は「家の宗教」として続けてきたところもあり、「宗教の自由」から「個の宗教」が重視されるようになってから久しいです。お念仏が相続されるようにつとめて参りたいものです。